

項目No.	Surgical Pathology (SP)	訳語(正式)	訳語(簡易版)	SP中の生物学的挙動に関する記述	注意点
<b>1.</b>	<b>Fibrous Tumors</b>	<b>線維性腫瘍</b>	<b>線維性腫瘍</b>		
1.1.	Benign fibrous tumors	良性線維性腫瘍	良性線維性腫瘍		
1.1.1.	Fibroma	線維腫	線維腫	良性であり、完全切除によって治癒する。	
	Conventional fibroma*	通常型線維腫	線維腫		
	Keloidal fibroma*	ケロイド様線維腫			
1.1.2.	Myxoma	粘液腫	粘液腫	良性であり、完全切除によって治癒する。正常組織との境界が不明瞭なため、完全切除は容易ではない。	
1.1.3.	Inflammatory myofibroblastic tumor	炎症性筋線維芽細胞腫瘍	線維腫	発生報告が稀な腫瘍ではあるが、完全切除によって治癒する。	免疫染色で確定した場合は正式名称を使用。それ以外で、炎症など所見から疑われる場合は、コメントにその旨を記述。
1.1.4.	Dermatofibroma	皮膚線維腫	皮膚線維腫	良性で、完全切除によって治癒する。	
1.1.5.	Equine sarcoid	馬サルコイド	馬サルコイド	局所浸潤するが、fibroblastic と malignant/"malevolent"のタイプは特に浸潤性が高い。切除後に再発することが多いが、遠隔転移の報告はない。	
1.1.6.	Feline sarcoid	猫サルコイド	猫サルコイド	自然治癒することがある。不完全切除後の再発が頻繁に起こる。遠隔転移の報告はない。	
<b>1.2.</b>	<b>Malignant fibrous tumors</b>	<b>悪性線維性腫瘍</b>	<b>悪性線維性腫瘍</b>		
1.2.1.	Fibrosarcoma	線維肉腫	線維肉腫	局所浸潤性の腫瘍で、再発する可能性がある。遠隔転移は稀である。	免疫染色で確定した場合は正式名称を使用。それ以外で、炎症など所見から疑われる場合は、コメントにその旨を記述。
	Conventional fibrosarcoma*	通常型線維肉腫	線維肉腫		
	Keloidal fibrosarcoma*	ケロイド様線維肉腫			
	Myofibroblastic fibrosarcoma*	筋線維芽細胞性線維肉腫			
1.2.2.	Myxosarcoma (myxoid fibrosarcoma)	粘液肉腫 (粘液様線維肉腫)	粘液肉腫	浸潤性のため完全切除が困難である。再発することが多いが、転移は稀である。	
1.2.3.	Feline injection site sarcoma**	猫注射部位肉腫	線維肉腫	高度の浸潤性増殖のため、治癒的切除が困難であり、再発率が高い。領域リンパ節、肺、縦隔への転移の報告がある。	
1.2.4.	Feline restrictive orbital myofibroblastic sarcoma**	猫拘束性眼窩筋線維芽細胞性肉腫	線維肉腫	進行性の増殖を示し、軟部組織や硬組織に浸潤するが、転移の報告は無い。	
1.3.	Tumor-like lesions	腫瘍様病変	腫瘍様病変		
1.3.1.	Collagenous hamartoma (collagenoma)	膠原線維過誤腫 (コラゲノーマ)	膠原線維過誤腫 (コラゲノーマ)	完全切除によって根治する。	
1.3.2.	Canine nodular dermatofibrosis	犬結節性皮膚線維症	犬結節性皮膚線維症	悪性転化の報告はない。予後は、嚢胞状腎癌等の発生に関連している。	旧名：Nodular dermatofibrosis of the German shepherd dog
1.3.3.	Hypertrophic scar and exuberant granulation tissue	肥厚性瘢痕と過剰肉芽	肥厚性瘢痕と過剰肉芽	反応性病変であるにもかかわらず、切除後に再発することがある。	
1.3.4.	Seroma	漿液腫	漿液腫	反応性病変であり、圧点や反復性外傷部では切除後に再発することがある。	
1.3.5.	Focal reactive fibroplasia (nodular fasciitis)	局所性反応性線維増生症 (結節性筋膜炎)	局所性反応性線維増生症 (結節性筋膜炎)	切除によって根治する。	
1.3.6.	Fibromatosis	線維腫症	線維腫症	報告例は無治療で予後良好であった	
<b>2.</b>	<b>Adipocytic tumors</b>	<b>脂肪細胞腫瘍</b>	<b>脂肪細胞腫瘍</b>		
2.1.	Benign adipocytic tumors	良性脂肪細胞腫瘍	良性脂肪細胞腫瘍		
2.1.1.	Lipoma	脂肪腫	脂肪腫	良性で、完全切除できれば治癒可能であるが、組織学的に周囲の正常な脂肪組織と区別できないため、完全切除の判定が難しいことがある。	
2.1.2.	Fibrolipoma	線維脂肪腫	線維脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.3.	Angiolipoma	血管脂肪腫	血管脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.4.	Chondrolipoma	軟骨脂肪腫	軟骨脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.5.	Osteolipoma	骨脂肪腫	骨脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.6.	Chondro-osteoblastic lipoma	軟骨骨芽細胞性脂肪腫	軟骨骨芽細胞性脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.7.	Lipoleiomyoma	脂肪平滑筋腫	脂肪平滑筋腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	
2.1.8.	Spindle cell lipoma	紡錘形細胞脂肪腫	紡錘形細胞脂肪腫	予後の情報は少ないものの、完全切除により治癒可能とされる。	
2.1.9.	Infiltrative lipoma	浸潤性脂肪腫	浸潤性脂肪腫	完全切除は難しく、再発する可能性がある。転移は起こらない。	
2.1.10.	Infiltrative angiolipoma	浸潤性血管脂肪腫	浸潤性血管脂肪腫	完全切除は難しく、再発する可能性がある。転移は起こらない。	
2.1.11.	Intermuscular lipoma**	筋間脂肪腫	(筋間) 脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	筋肉内への浸潤の有無を必ず確認し記述する
2.1.12.	Lipomatosis	脂肪腫症	脂肪腫症	良性であるが、病態は進行性で、皮膚のしわに重度の外傷を生じようになる。	
2.1.13.	Hibernoma	褐色脂肪腫	褐色脂肪腫	良性で、完全切除により治癒可能である。	日本ではチワワの筋肉に発生する事が多いが、多発例や浸潤性を示す例がある、UCP1は脂肪肉腫にも発現する、事からそれが褐色脂肪腫に該当するかは不確定。
<b>2.2.</b>	<b>Malignant adipocytic tumors</b>	<b>悪性脂肪細胞腫瘍</b>	<b>悪性脂肪細胞腫瘍</b>		
2.2.1.	Liposarcoma	脂肪肉腫	脂肪肉腫	局所再発することがあり、遠隔転移の発生率は低い。肺、肝臓、脾臓への転移の報告がある。皮下に発生する脂肪肉腫の予後は外科切除の成功に依存する。組織型による予後の違いは不明である。	
	Well-differentiated liposarcoma /atypical lipomatous tumor*	高分化型脂肪肉腫 /異型脂肪腫様腫瘍	脂肪肉腫		
	Dedifferentiated liposarcoma*	脱分化型脂肪肉腫			
	Myxoid liposarcoma*	粘液型脂肪肉腫			
	Pleomorphic liposarcoma*	多形型脂肪肉腫			

項目No.	Surgical Pathology (SP)	訳語(正式)	訳語(簡易版)	SP中の生物学的挙動に関する記述	注意点
<b>3.</b>	<b>Vascular tumors</b>	<b>脈管系腫瘍</b>	<b>脈管系腫瘍</b>		
3.1.	Benign vascular tumors	良性脈管系腫瘍	良性脈管系腫瘍		
3.1.1.	Hemangioma	血管腫	血管腫	生物学的挙動の項目が無く、分化した内皮細胞で内張りされた規則的な血管腔を形成する良性腫瘍と記述されている。	
	Cavernous hemangioma*	海綿状血管腫	血管腫		
	Capillary hemangioma*	毛細血管腫			
	Inflammatory lobular capillary hemangioma*	炎症性小葉性毛細血管腫			
	Mixed capillary-cavernous hemangioma*	毛細海綿状混合血管腫			
	Spindle cell hemangioma*	紡錘形細胞血管腫			
	Epithelioid hemangioma*	類上皮血管腫			
3.1.1.1.	Congenital hemangioma	先天性血管腫	先天性血管腫	出生時に存在するか、若齢時に発症し、良形で緩やかな増大傾向を示す。子牛では自然消失が報告されており、ヒトの乳児血管腫に類似している。	
3.1.1.2.	Dermal hemangioma	皮膚血管腫	血管腫	良形で、完全切除によって治癒する。	
3.1.1.2.1.	Angiokeratoma	被角血管腫	被角血管腫	完全切除によって治癒する。	
3.1.1.2.2.	Solar-induced dermal hemangioma	日光誘発性皮膚血管腫	血管腫	良形で、完全切除により治癒する。日光への曝露が続くと、新しい腫瘍が発生する可能性がある。毛細血管型や紡錘形細胞型血管腫、血管肉腫への悪性転化が起こることもある。	
3.1.1.3.	Subcutaneous hemangioma	皮下血管腫	血管腫	良形で、完全切除すれば治癒する。	
3.1.1.4.	Infiltrative hemangioma	浸潤性血管腫	浸潤性血管腫	良形で十分なマージンをとって完全切除すれば治癒する。	
3.1.2.	Lymphangioma	リンパ管腫	リンパ管腫	良形で、切除によって治癒する。	
3.2.	Intermediate vascular tumors	良悪性中間型脈管系腫瘍	良悪性中間型脈管系腫瘍	「血管内皮腫」は生物学的挙動に関する情報(文献)が乏しいので「中間悪性腫瘍」としては使用せず、組織学的に良性と悪性の中間と思われる物に使用する。	
3.2.1.	Hemangioendothelioma	血管内皮腫	血管内皮腫	類上皮血管内皮腫ならびにカポジ肉腫様血管腫瘍は中間悪性度の挙動を示し、浸潤性であり、再発する可能性があり、時に所属リンパ節や内臓に転移することがある。腫瘍関連の合併症や死亡が起こり得る。	
	Epithelioid hemangioendothelioma*	類上皮血管内皮腫	血管内皮腫		
	Retiform hemangioendothelioma*	網様血管内皮腫			
	Kaposiform hemangioendothelioma (Kaposi-like vascular tumor, spindle cell hemangioendothelioma) *	カポジ型血管内皮腫 (カポジ様血管腫瘍、紡錘形細胞血管内皮腫)			
<b>3.3.</b>	<b>Malignant vascular tumors</b>	<b>悪性脈管系腫瘍</b>	<b>悪性脈管系腫瘍</b>		
3.3.1.	Hemangiosarcoma	血管肉腫	血管肉腫	浸潤性が強く、転移率の高い腫瘍である。組織学的なグレードは予後と相関していない。	
	Conventional/well-differentiated hemangiosarcoma*	通常型/高分化型血管肉腫	血管肉腫		
	Kaposiform (spindle cell) hemangiosarcoma*	カポジ型(紡錘形細胞)血管肉腫			
	Epithelioid hemangiosarcoma*	類上皮血管肉腫			
3.3.1.1.	Cutaneous and subcutaneous hemangiosarcoma***	皮膚および皮下血管肉腫	血管肉腫	皮膚血管肉腫は、広範囲の外科手術を必要とする。内臓の血管肉腫に比べ、侵襲性が低く、転移の可能性は低く、生存期間が長い。皮下血管肉腫は、より侵襲性が強く、転移リスクが高く、切除後に再発する傾向がある。複数形成されている場合は、内臓原発血管肉腫の転移の可能性が。グレード分類は、予後の予測に有用であることは証明されていないが、病変の深さと浸潤の程度は予後の予測に有用である。	
3.3.1.2.	Intramuscular hemangiosarcoma***	筋肉内血管肉腫	血管肉腫	悪性度が高く、局所浸潤性が強く、高い転移率を有する。	
3.3.1.3.	Retroperitoneal hemangiosarcoma***	後腹膜血管肉腫	血管肉腫	局所浸潤性を示し、時に局所リンパ節に転移する。後腹膜出血や血腹が起こることもある。	
3.3.1.4.	Visceral hemangiosarcoma***	内臓血管肉腫	血管肉腫	診断後の生存期間が最も短い。転移は、診断時に認められ、肝臓や肺(脾臓と心臓から)に好発し、その後、複数の臓器に広がる。犬における最も一般的な合併症は、血腹や腫瘍の播種を伴う脾臓破裂や右心耳からの出血による心タンポナーデがある。グレード分類は、予後評価には有用ではない。	
3.3.2.	Lymphangiosarcoma (angiosarcoma of lymphatics)	リンパ管肉腫 (リンパ管の脈管肉腫)	リンパ管肉腫 (リンパ管の脈管肉腫)	血管肉腫よりも転移率が低い。再発は一般的であり、局所リンパ節、肺および内臓への転移が発生する。	
3.3.2.1.	Feline ventral abdominal lymphangiosarcoma**	猫腹側腹部リンパ管肉腫	リンパ管肉腫	緩徐に浸潤性に増殖する。切除が難しく、再発は一般的であるが、転移することは稀である。	
<b>3.4.</b>	<b>Tumor-like lesions</b>	<b>腫瘍様病変</b>	<b>腫瘍様病変</b>		
3.4.1.	Vascular hamartoma	血管過誤腫	血管過誤腫	完全切除により治癒するが、中枢神経に発生した場合はその限りではない。	
3.4.2.	Vascular hamartoma of the scrotum	陰囊の血管過誤腫	陰囊の血管過誤腫	完全切除により治癒する。	
3.4.3.	Venous malformation	静脈奇形	静脈奇形	完全切除により治癒する。	
3.4.4.	Arteriovenous malformation	動静脈奇形	動静脈奇形	完全切除により治癒する。	
3.4.5.	Angiomatosis	血管腫症	血管腫症	自然退縮は報告されていない。完全な外科的切除で治癒することができる。皮膚の病変は潰瘍を形成し、感染して敗血症を引き起こす可能性がある。全身性の体幹の血管腫症の犬では、数年かけて病変が進行する。内臓病変は、出血、骨溶解、骨折を生じることがあり、髄膜や脳では圧迫性の神経障害を引き起こすことがある。	
	Cavernous angiomatosis*	海綿状血管腫症	血管腫症		
	Capillary angiomatosis*	毛細血管腫症			
	Arteriovenous angiomatosis*	動静脈血管腫症			
3.4.5.1.	Progressive angiomatosis	進行性血管腫症	血管腫症	特徴的で、拡大的で、急速に進行し、破壊的、浸潤性に増殖する。指の軟部組織では特に攻撃的である。四肢の腫瘍は、急速な近位への拡張、浸潤および組織置換を示し、骨への浸潤と溶解を起こすことがある。完全な外科的切除で治癒するが、進行が速く境界不明瞭な病変のため、根治は非常に困難である。再発が多く断脚が必要になることがよくある。転移は起こらない。	
3.4.5.2.	Bovine cutaneous angiomatosis	牛皮膚血管腫症	牛皮膚血管腫症	若年性血管腫症は良性的の病変であるが、多臓器におよぶ若年性では、時折死に繋がる内出血をもたらす。皮膚の進行性血管腫症は、雄牛の血管肉腫に進行する可能性がある。	
3.4.5.3.	Lymphangiomatosis	リンパ管腫症	リンパ管腫症	浸潤性のため、不完全切除後に病変が再発する。	
3.4.6.	Feline reactive angioendotheliomatosis	猫反応性血管内皮細胞腫症	猫反応性血管内皮細胞腫症	反応性であるが、予後は悪く、一般的には死後に診断される。	
3.4.7.	Bacillary angiomatosis	細菌性血管腫症	細菌性血管腫症	抗生物質で退縮する。	
3.4.8.	Papillary endothelial hyperplasia (reactive intravascular proliferation)	乳頭状内皮過形成 (反応性血管内増殖)	乳頭状内皮過形成 (反応性血管内増殖)	完全切除により治癒する。	
3.4.9.	Arteriovenous fistula	動静脈瘻	動静脈瘻	ゆっくりと進行し、骨への浸潤はない。切除により治癒する。四肢の病変では断脚が必要になる事がある。	
3.4.10.	Plexiform vascular proliferation of lymph node (endothelial proliferative disorder, plexiform vasculopathy, vascular transformation of lymph node sinuses)	リンパ節の叢状血管増殖 (内皮増殖性疾患、叢状血管症、リンパ洞の血管形質転換)	リンパ節の叢状血管増殖 (内皮増殖性疾患、叢状血管症、リンパ洞の血管形質転換)	リンパ節郭清により治癒する。	

項目No.	Surgical Pathology (SP)	訳語(正式)	訳語(簡易版)	SP中の生物学的挙動に関する記述	注意点
<b>4.</b>	<b>Perivascular tumors</b>	<b>血管周囲腫瘍</b>	<b>血管周囲腫瘍</b>		
4.1.	Glomus Tumor	グロムス腫瘍	グロムス腫瘍	良性であり、切除により治癒する。腫瘍細胞が血管内に突出する像は、悪性の挙動を示唆するものではない。	
4.2.	Perivascular wall tumors	血管周囲壁腫瘍	血管周皮腫 (血管周囲壁腫瘍) 血管周囲壁腫瘍 (血管周皮腫)	局所再発の可能性があるが、転移は稀である。特に腫瘍の直径が5cm 以上で、浸潤性に増殖または骨格筋内に結節を形成する症例では、腫瘍境界部で切除した場合に再発のリスクが高い。	抗体などの問題で、細分類のルーチン化は現状不可能。血管周囲壁腫瘍の中に血管周皮腫が含まれている事、血管周皮腫が広く知られている事から、簡易版の診断名を使用。血管周囲壁腫瘍の臨床経過はSTSのグレード分類との相関が無く、切除縁の状態との相関があるという文献がでている。
	Myopericytoma	筋周皮腫			
	Perivascular myoma	血管周囲筋腫			
	Angiofibroma	血管線維腫	血管周皮腫 (血管周囲壁腫瘍) 血管周囲壁腫瘍 (血管周皮腫)		
	Angiomyofibroblastoma	血管筋線維芽細胞腫			
	Hemangiopericytoma	血管周皮腫			
<b>5.</b>	<b>Smooth muscle tumors</b>	<b>平滑筋腫瘍</b>	<b>平滑筋腫瘍</b>		
5.1.	Benign smooth muscle tumors	良性平滑筋腫瘍	良性平滑筋腫瘍		
5.1.1.	Leiomyoma	平滑筋腫	平滑筋腫	良性であり、切除により治癒する。	
	Pileleiomyoma*	立毛筋平滑筋腫			
	Angioleiomyoma*	血管平滑筋腫	平滑筋腫		
	Deep-seated leiomyoma*	深在性平滑筋腫			
5.2.	Malignant smooth muscle tumors	悪性平滑筋腫瘍	悪性平滑筋腫瘍		
5.2.1.	Leiomyosarcoma	平滑筋肉腫	平滑筋肉腫	皮膚および皮下組織の平滑筋肉腫は予後良好である。不完全切除では再発する可能性があるが、転移の報告は無い。深在性平滑筋肉腫は、局所再発および転移する可能性がある。	
<b>6.</b>	<b>Syncytial striated muscle tumors</b>	<b>横紋筋腫瘍</b>	<b>横紋筋腫瘍</b>		
6.1.	Benign syncytial striated muscle tumors	良性横紋筋腫瘍	良性横紋筋腫瘍		
6.1.1.	Rhabdomyoma	横紋筋腫	横紋筋腫	良性であり、切除により治癒するが、完全切除が困難な部位 (犬の喉頭など) に発生するため、再発や安楽死する症例が多い。先天性の心臓横紋筋腫は、偶発所見の場合が多い。	
6.2.	Malignant syncytial striated muscle tumors	悪性横紋筋腫瘍	悪性横紋筋腫瘍		
6.2.1.	Rhabdomyosarcoma	横紋筋肉腫	横紋筋肉腫	浸潤性腫瘍であり、局所再発および転移する可能性がある。ブドウ状横紋筋肉腫は転移率が低いとされていたが、生物学的挙動と組織型の関連性については十分に検討されていない。	
	Embryonal rhabdomyosarcoma*	胎子型横紋筋肉腫			
	Botryoid rhabdomyosarcoma*	ブドウ状横紋筋肉腫	横紋筋肉腫		
	Pleomorphic rhabdomyosarcoma*	多形型横紋筋肉腫			
	Alveolar rhabdomyosarcoma*	胞巣型横紋筋肉腫			
6.3.	Tumor-like lesions	腫瘍様病変	腫瘍様病変		
6.3.1.	Skeletal muscle hamartoma	骨格筋過誤腫	骨格筋過誤腫	切除により治癒する。	
<b>7.</b>	<b>Nerve sheath tumors</b>	<b>神経鞘腫瘍</b>	<b>神経鞘腫瘍</b>		
7.1.	Benign nerve sheath tumors (benign peripheral nerve sheath tumors)	良性神経鞘腫瘍 (良性末梢神経鞘腫瘍)	良性神経鞘腫瘍 (良性末梢神経鞘腫瘍)		
7.1.1.	Schwannoma	シュワン細胞腫	シュワン細胞腫	良性で、切除によって治癒するが、不完全切除や脊髄に浸潤している場合には、再発や浸潤部位における腫瘍増大がみられる。	
7.1.2.	Neurofibroma	神経線維腫	シュワン細胞腫	良性で、完全切除で治癒するが、不完全切除や脊髄に浸潤していると再発する	
7.1.3.	Perineurioma	神経周膜腫	神経周膜腫	報告は非常に少ないが、良性と考えられている。	
7.1.4.	Neurofibromatosis	神経線維腫症	神経線維腫症	これらの腫瘍は病変の部位や大きさにもよるが、一般的にと殺動物の偶発病変として発見される。また、運動失調および起立困難に進行する可能性のある前肢または後肢不全を引き起こすことが報告されている。	
7.2.	Granular cell tumor	顆粒細胞腫	顆粒細胞腫	犬の舌に発生するGCT は良性で、外科切除で治療できる。馬の肺に発生するGCT も良性であるが、気管支に近い部位に形成されるため、呼吸困難、咳嗽、運動不耐性、体重減少を誘発する可能性がある。他の部位においても、多形性、核分裂像の増加、壊死、浸潤性増殖などの組織学的な特徴に基づいて悪性と診断された報告が少数あるが、転移についての記載はない。	
7.3.	Malignant nerve sheath tumors (malignant peripheral nerve sheath tumors)	悪性神経鞘腫瘍 (悪性末梢神経鞘腫瘍)	悪性神経鞘腫瘍 (悪性末梢神経鞘腫瘍)	浸潤性で、局所再発の可能性があり、進行すれば転移することがある。	
7.4.	Tumor-like lesions	腫瘍様病変	腫瘍様病変		
7.4.1.	Traumatic neuroma	外傷性神経腫	外傷性神経腫	腫瘍ではなく、末梢神経の異常な再生病変である。疼痛を伴い、自傷の原因となる可能性がある。外科切除で通常は治癒する。	
<b>8.</b>	<b>Synovial and perisynovial tumors</b>	<b>滑膜および滑膜周囲腫瘍</b>	<b>滑膜および滑膜周囲腫瘍</b>		
8.1.	Benign synovial and perisynovial tumors	良性滑膜および滑膜周囲腫瘍	良性滑膜および滑膜周囲腫瘍		
8.1.1.	Synovial hemangioma	滑膜血管腫	滑膜血管腫	良性で完全切除により治癒するが、病変が広範囲に及ぶ場合は断脚が必要となる。転移の報告はない。	
8.1.2.	Periarticular fibroma	関節周囲線維腫	関節周囲線維腫	小型の腫瘍であれば外科切除で治癒するが、腫瘍が大型の場合には断脚が必要になる。転移の報告はない。	
8.1.3.	Giant cell tumor of tendon sheath	腱鞘巨細胞腫瘍	腱鞘巨細胞腫瘍	小型の腫瘍であれば外科切除で治癒するが、腫瘍が大型の場合には断脚が必要になる。転移の報告はない。	
8.2.	Intermediate synovial and perisynovial tumors	良悪性中間型滑膜および滑膜周囲腫瘍	良悪性中間型滑膜および滑膜周囲腫瘍		
8.2.1.	Synovial myxoma	滑膜粘液腫	滑膜粘液腫	関節包内で小型の単結節あるいは多結節状の腫瘍を形成し、浸潤性を示すため低悪性度の粘液肉腫とみなされる場合もある。小病変に対しては局所的な病変切除が行われる、より広範囲の切除が実施される場合もある。再発の可能性はあるが、転移の報告は稀である。	
8.3.	Malignant synovial and perisynovial tumors	悪性滑膜および滑膜周囲腫瘍	悪性滑膜および滑膜周囲腫瘍		
8.3.1.	Periarticular histiocytic sarcoma	関節周囲の組織球性肉腫	組織球性肉腫	診断時にしばしば既に転移している。他の部位に発生する組織球性肉腫と同様で、局所のリンパ節に転移した後に全身に播種する。	
8.3.2.	Synovial myxosarcoma	滑膜粘液肉腫	滑膜粘液肉腫	滑膜粘液腫を参照	
8.3.3.	Other tumors	その他の腫瘍	肉腫NOS	軟部組織に一般的に発生する腫瘍全般に付いての記述なので、個別の生物学的挙動の項目が無い	狭義のSTSに相当する場合は、軟部組織肉腫 (STS) を使用
8.4.	Tumor-like lesions	腫瘍様病変	腫瘍様病変		
8.4.1.	Villonodular synovitis	絨毛結節性滑膜炎	絨毛結節性滑膜炎	進行性的変性関節疾患であり、線維化、滑液の過剰産生、関節包の部分的な骨化や関節内の骨棘形成を伴って関節が腫大し、破行の原因となる。	
8.4.2.	Synovial cyst and ganglion	滑膜嚢胞およびガングリオン	滑膜嚢胞およびガングリオン	滑膜嚢胞は、関節から膨隆する嚢胞構造であり、変形性関節症が進行するにつれて徐々に拡大する可能性があるが、時間が経つと軽快する場合がある。基礎疾患である変性性関節症が破行の原因となる。	
8.4.3.	Synovial osteochondromatosis	滑膜軟骨腫症	滑膜軟骨腫症	破行や関節腫大を伴う進行性の疾病であり、軟骨肉腫に進行する可能性がある。	
8.4.4.	Progressive ossifying fibrodysplasia (fibrodysplasia ossificans progressiva)	進行性骨化性線維異形成症 (進行性骨化性線維異形成症)	進行性骨化性線維異形成症 (進行性骨化性線維異形成症)	深部の線維組織において進行性の骨化が重度に見られ、関節の可動性が減少する。筋肉内に病変はみられない。	
8.4.5.	Pseudogout-calcium pyrophosphate deposition (CPPD) disease	偽痛風-ピロリン酸カルシウム沈着 (CPPD) 疾患	偽痛風-ピロリン酸カルシウム沈着 (CPPD) 疾患	一般的には単一の関節に発生し、関節腫大や破行がゆっくりと進行する非腫瘍性疾患である。	

項目No.	Surgical Pathology (SP)	訳語(正式)	訳語(簡易版)	SP中の生物学的挙動に関する記述	注意点
9.	<b>Mesothelial tumors</b>	<b>中皮細胞腫瘍</b>	<b>中皮細胞腫瘍</b>		
9.2.	Benign mesothelial tumors	良性中皮細胞腫瘍	良性中皮細胞腫瘍	生物学的挙動の項目が無い(多くの病理医は全ての中皮腫は悪性と考えている)	
9.3.	<b>Malignant mesothelial tumors</b>	<b>悪性中皮細胞腫瘍</b>	<b>悪性中皮細胞腫瘍</b>		
9.3.1.	Epithelioid mesothelioma	上皮型中皮腫	中皮腫(上皮型)	中皮腫の臨床徴候は腫瘍形成部位と、侵される体腔に依存している。漿膜のリンパ管が腫瘍によって閉塞するため、漿液滲出が生じやすい。腹膜中皮腫はしばしば腹水を生、牛の先天性中皮腫の場合は難産の原因になることがある。胸膜中皮腫は胸水貯留と呼吸困難を引き起こし、心嚢液貯留を伴う心嚢中皮腫は心タンポナーデを起こすことがある。その他の臨床徴候として、虚弱、倦怠、体重減少、食欲減退、嘔吐、出血が認められるかもしれない。腫瘍は通常、漿膜に播種することで拡大し、漿液滲出や死をもたらすが、リンパ管を介して遠隔転移する可能性もある。	
9.3.2.	Sarcomatoid mesothelioma	肉腫型中皮腫	中皮腫(肉腫型)		
9.3.3.	Biphasic (mixed epithelioid and sarcomatoid) mesothelioma	二相型(上皮型と肉腫型が混合した)中皮腫	中皮腫(二相型)		
9.4.	<b>Tumor-like lesions</b>	<b>腫瘍様病変</b>	<b>腫瘍様病変</b>		
9.4.1.	Mesothelial hyperplasia	中皮過形成	中皮過形成	中皮過形成を示す症例の予後は通常は良好だが、漿膜の傷害の原因によって異なる。	
9.4.2.	Idiopathic pericarditis of dogs (benign or idiopathic pericardial effusion)	犬の特発性心膜炎(良性あるいは特発性心嚢液貯留)	犬の特発性心膜炎(良性あるいは特発性心嚢液貯留)	適切に治療すれば予後良好で、自然治癒することもある。	
9.4.3.	Mesothelial inclusions	中皮封入	中皮封入	偶発的な所見であり、臨床的意義は知られていない	
10.	<b>Extraskelatal chondro-osseous tumors</b>	<b>骨外性軟骨・骨腫瘍</b>	<b>骨外性軟骨・骨腫瘍</b>		
10.1.	<b>Benign extraskelatal chondro-osseous tumors</b>	<b>良性骨外性軟骨・骨腫瘍</b>	<b>良性骨外性軟骨・骨腫瘍</b>		
10.1.1.	Extraskelatal osteoma	骨外性骨腫	骨外性骨腫	良性であり、完全切除により治癒する。	
10.1.2.	Extraskelatal chondroma	骨外性軟骨腫	骨外性軟骨腫	気管・喉頭に発生した病変の多くは予後良好と報告されている。	
10.2.	<b>Malignant extraskelatal chondro-osseous tumors</b>	<b>悪性骨外性軟骨・骨腫瘍</b>	<b>悪性骨外性軟骨・骨腫瘍</b>		
10.2.1.	Extraskelatal osteosarcoma	骨外性骨肉腫	骨外性骨肉腫	局所再発や転移を起こすことがある。全身性の転移が起ると予後は悪い。乳腺原発では肺にしばしば転移を起こす。犬の乳腺と甲状腺以外の骨外性骨肉腫は、広範囲なマージンをとり完全切除されれば長期生存が得られることもある。外科切除後の化学療法により、生存期間を延ばすことがしばしば可能である。猫でも広範囲切除により長期生存が可能になることがある。	
10.2.2.	Extraskelatal chondrosarcoma	骨外性軟骨肉腫	骨外性軟骨肉腫	転移は稀で再発することはあるが、広範囲切除により腫瘍の長期的制御が可能である。犬では肺転移の報告がある。	
10.3.	<b>Tumor-like lesions</b>	<b>腫瘍様病変</b>	<b>腫瘍様病変</b>		
10.3.1.	Osteoma cutis	皮膚骨腫	皮膚骨腫	予後は発症要因に関係する。単独で発症した病変は外科切除により治癒する。	
10.3.2.	Ossifying myositis	骨化性筋炎	骨化性筋炎	外科切除が有効である。	
10.3.3.	Giant cell reparative granuloma of the digit	指先の巨細胞性修復性肉芽腫	指先の巨細胞性修復性肉芽腫	完全切除が有効であるが、不完全切除では再発することもある。	
11.	<b>Tumors with uncertain differentiation</b>	<b>分化不明腫瘍</b>	<b>分化不明腫瘍</b>		
11.1.	Undifferentiated pleomorphic sarcoma (anaplastic sarcoma with giant cells, giant cell tumor of soft tissue, malignant fibrous histiocytoma)	未分化多形肉腫(巨細胞を伴う退形成肉腫、軟部組織の巨細胞腫瘍、悪性線維性組織球腫)	肉腫NOS	局所浸潤性がある。腫瘍細胞の異なる由来を反映するかのよう、転移に関する情報は様々である。	狭義のSTSに相当する腫瘍との誤解を招くので、STSは使用しない。
11.2.	Equine giant cell tumor of soft parts	馬の軟部巨細胞腫瘍	馬の軟部巨細胞腫瘍	再発率は低く、転移は認められていない。	
11.3.	Abdominal neoplasms of ferrets with features of adrenocortical tumors (ventral abdominal neoplasm with features of adrenocortical tumors)	副腎皮質腫瘍の特徴を持つフェレットの腹部腫瘍(副腎皮質腫瘍の特徴を有する腹腔内腫瘍)	副腎皮質腫瘍の特徴を持つフェレットの腹部腫瘍(副腎皮質腫瘍の特徴を有する腹部腫瘍)	完全切除により治癒する。再発や転移は報告されていない。	
11.4.	Malignant mesenchymoma	悪性間葉腫	肉腫NOS	生物学的挙動は十分にわかっていない。犬の症例では転移の危険性が示されている。	狭義のSTSに相当する腫瘍との誤解を招くので、STSは使用しない。

診断名\* : 特徴的な組織像があれば正式名称を使用  
 診断名\*\* : 臨床像の情報がある場合は正式名称を使用  
 診断名\*\*\* : 腫瘍の存在部位を所見に必ず記述する

STSと肉腫NOSについて : 臨床医は「STSはグレード分類できる腫瘍」という認識がある。しかし、グレード分類を決定した際に対象となっていた腫瘍は脂肪肉腫、線維肉腫、粘液肉腫、血管周囲壁腫瘍(血管周皮腫)、末梢神経鞘腫瘍(非腕神経叢)であり<sup>\*\*</sup>それらの腫瘍が疑われる場合はSTSを使用し、それら以外が疑われる場合には肉腫NOSを使用する方が臨床医は理解しやすい。  
 (\*<sup>\*\*</sup>実際には未分化多形肉腫と悪性間葉腫も含まれていたが、これらは肉腫NOSとして扱う方が良い。)